

第 63 話<日州新聞>の要約と参考資料

第 63 話<日州新聞>の要約

1925 年 4 月、岩戸村の甲斐徳次郎村長は、解剖した牛の内臓を詰めた瓶を持って、宮崎県衛生課を訪ねました。村長の毒物鑑定の依頼に冷ややか対応した県から、公式の鑑定結果は届きませんでした。垂ヒ酸鉍山による害毒を止める絶好の機会が失われました。

第 63 話<日州新聞>の参考資料

6 3 - 1 甲斐徳次郎さんの話（1975 年ごろ聴取）

私は岩戸村長と西臼杵郡畜産組合長を兼ねていたので、土呂久鉍山の近所の牛馬がバタバタ倒れたとき、獣医の池田君と鈴木君に精密な検査をやらせたことがある。解剖した牛の内臓などを瓶に詰めて解剖書といっしょに県へ持っていき鑑定を頼んだところが、「瓶に封印がないから本ものかどうか信用できない」と言われた。なかなか受け付けてくれないので「地元の村長がもってきたものではないか。疑念は無用」と言って置いてきた。被害の状況からみて重大問題なのに、県はいっこうにとりあげようとせず、鑑定の結果の連絡もなかった。

6 3 - 2 甲斐村長に対する宮崎県の態度

川原一之「斃牛」（「怨民の復権Ⅱ」P62）より

解剖から 2 日後の 4 月 9 日、甲斐村長は牛の臓器を詰めた瓶と死体解剖書を持って、岩戸から約 150 キロ、宮崎県庁の県警察部衛生課をたずねた。そこで見事に、県への期待を裏切られるのである。思ってもみなかった係員の応待に、面喰った。

「瓶に封印がないから、本ものかどうか信用できない」

「地元の村長がもってきたものだ。そんな疑念は無用」

長いやりとりのあと、甲斐村長はどうか臓器と解剖書を預け、死因究明のための病理的薬物的鑑定をお願いして引揚げた。県は、家畜被害に苦しむ農民よりも鉍山資本の立場にあることを態度で示した。積極的に動く気配は感じられない。村長の落胆に追討ちをかけるように、地元の新聞が、奇病の追求に水をさす記事を書いた。日州新聞の 11 日付夕刊は「果して垂砒酸中毒か 斃死した牛の検査を衛生課に願ひ出た」という 2 段見出しの記事で、次のように報道している。（以下略）

63-3 日州新聞

小川全夫著「よだきぼの世界」P117より

1901年（明治34）8月24日に創刊された「日州独立新聞」は、本格的な商業新聞の最初であった。活版所を開いていた野井唯吉が、弟の数太郎とともに始めた新聞で、言文一致体、政治的中立、実業界志向によって特徴づけられる。県内のニュースだけでなく、電報通信によって県外のニュースも盛り込み、講談小説を連載したりして、大衆紙としての評判を博し、ついには「宮崎新報」を廃刊に追いこみ、その機構を吸収して、「日州新聞」に名をあらためる。

*宮崎新報：「日向分県運動」の活動家岩切門二によって発行され、しだいに政友会系の政党機関紙になっていった。政論新聞の一種。

宮崎県立図書館所蔵の日州新聞より

- ・大正14年当時、朝刊・夕刊あり。社長は野井穂山
- ・発行所 宮崎市旭通 日州新聞社
- ・発行兼編集人 伊藤菊蔵
- ・印刷人 戸高栄蔵
- ・明治34年7月24日 第三種郵便物認可
- ・郵便配達料供 1か月1円5銭、 3か月3円5銭、 1部5銭

63-4 日州新聞 大正14年4月8日夕刊

本県各地産出の亜砒酸が / 本県畜産界に大打撃 / 亜砒酸中毒で牛馬が斃死する / 本当ならば由々敷き問題

宮崎県は世界随一の亜砒酸国であり、而してまた名馬の産地でもある。任意の地殻を破れば必ず其処に亜砒酸鉍脈の走るを見、草繁き処に耳を寄すれば必ず名馬の囁くを聞く。ところが此の亜砒酸と馬匹がまた世界比類の大相撲をとってゐることは余り知られてゐないのである。

本県で最も亜砒酸採掘の盛んな処は何と云つても西臼杵郡で現在7ヶ所の鉍山を数へる。ところがこの亜砒酸採掘が初まって以来西臼杵郡殊に鉍山の多い岩戸村外六方面の馬が奇病に悩まされて死んで了ふ。昔は外六馬とて名声を馳てみた程に一農家で五、六頭も飼つてゐたがこの災難を恐れて今では外六部落に僅数頭しか飼つてゐない。その僅数頭の中二匹迄がまた本年に入って亜砒酸中毒をうけたらしく非常な重態に陥つたので岩戸村落は上下をあげての大騒ぎである。

亜砒酸製造中、不凝結の亜砒酸ガスが野山を流れて草も木も枯らして了ふがそのガスに当てられた草葉を誤つて馬にやらうものなら忽ち全身に湿疹を發し漸次毛が抜けて衰弱の後死んで了ふのだと云ふのである。

だから何とか鉦山に対して善後策をとってくれと県当局に向ひ猛烈なる運動を捲き起した。一方これに対し福岡鉦務所の弁明は、

亜砒酸を鉦石の中よりガス体として導き之を冷却凝結せしめて亜砒酸をとるのであるが其の時冷却しきれないアヒサンガスが亜硫酸ガスと共に野外へ遁れ出することは事実であるけれどもアヒサンガスは重味のあるものであるから直に下降し従って拡がる範囲が限られてゐるので遠距離の草にまでしみ込むことは学理上立証されないことであらうアヒサンガスの遊離分散する区域は常に一定の範囲草木が枯れ果ててゐるからそれより遠くまでアヒサンは絶対に作用せぬのだ。

と云ふのである。鉦務署の語る如くであれば安心だが事實は馬が死亡して居り併も本県下はドコでも亜砒酸採掘が可能なので将来全県下に亘り亜砒酸採掘が行はるれば日向馬総てが死んで了ふと云ふ恐ろしい結論になるので本県畜産界は刮目して事實の解決を待ってゐる処がまた一説には岩戸方面の馬が続々病死することは事實であるが必ずしもアヒサン中毒ではなく鉦山と同地村民の間に土地方面其の他で醜ひ暗闘がありこの機に乗じて何事かを企てんとしてゐる所謂会社ゴロの一派が巧に農民を煽つてゐるのだとも伝えられるのであるが兎に角県当局は事實につき徹底的調査を行ふこととなった。

63-5 日州新聞 大正14年4月11日夕刊

果して / 亜砒酸中毒か / 斃死した牛の検査を / 衛生課に願ひ出た

西臼杵郡特に岩戸村方面では亜砒酸鉦附近の牛馬が頻りに斃死する。多分亜砒酸中毒のためであらう由々敷問題であると当の西臼杵郡民はいはずもがな本県畜産界は上下をあげて騒いでゐる。それは既報の通りであるが……。

重態に陥つてゐた岩戸村外六の牛がトウトウ数日前死んで了つた。そして其の死因が全く判明せず西臼杵郡畜産係では多分亜砒酸中毒の結果らしいと認めた。これがため其の真否をただすべく甲斐岩戸村長は、その斃牛の内臓淋巴腺、異様物、血塊、血液脱毛並に脱毛部皮膚等を携へ病理的並に薬物的の解決を与へてくれと九日県衛生課に出頭した。

けれども斃牛から亜砒酸を検出しそれによつて死因を決定するには斃死当時から解剖、検出に至るまで現場に至つて細密なる注意を行はなければ死後アヒサン分が附着した場合でも同じ検出結果となるのでアヒサンの存在を認めてもそれが必ずしも死因であつたと早断するに躊躇する理由あり。

これがため更に実地検証によるか或は死畜を現場で手に入るまで検査を見合はず意向であつたけれども甲斐村長等の切なる願ひあり、先づ獣医部の方で10日より病理的検査を行ひ13日頃から薬物検査を施行するに決定した。この結果果してドウ解決されるか判明せぬが同斃牛は発病後数ヶ月にして死んだものであるのでアヒサン中毒によるものとは思はれぬ節あり或は結核性疾患が直接死因でないかともみられてゐる。

63-6 日州新聞 大正14年5月11日朝刊

岩戸より

煙毒調査 篠原県技師は池田郡技師、矢野警技手同伴岩戸村字土呂久重砒酸煙毒問題調査のため5月3日午前7時頃出張あり

*注 宮崎県職員録(大正14年1月1日現在)より

農商課 産業技師種畜場勤務 篠原幸一

高千穂警察署 衛生技手 矢野 誦

63-7 日州新聞 大正14年6月3日夕刊

西臼杵岩戸の / 疑問の砒酸中毒 / 県でも徹底的調査する

去る4月6日、西臼杵郡岩戸村土呂久佐藤一蔵方の黒牡牛1頭が死んで以来、同地に於ける野村鋳業所のアヒサン工場が問題の中心となった。その当時死んだ牛は西臼杵の畜産技手が解剖したり尚県庁衛生課でも充分の調査をしたが衛生課の解剖の結果はアヒサン中毒ではないと云ってゐる。が畜産関係者の方では同地の牛や馬がすでに10数頭罹病し、これを転地療養さすればなほるが若し転地させぬとだんだん弱って死ぬる処から相当アヒサン鋳に関係があるものとして篠原技師も調査した。尚今度は蔵川畜産局長が来県したのを機に場合によっては本省から技師の派遣を乞ふ様になる様子である。中毒問題はかふしてまだ不明のうちにあるが同地方を調査したものの報告を見ると

アヒサン工場のある附近は従来盛に出来てゐた椎茸も蜜蜂もみんな出来なくなったり、死んでしまつて居り、牛馬は右様だと云つて居る。

果して事実とすれば大問題であるから県ではなを充分の調査をする様である。

*本省：農商務省